

「臨地語学研修報告——アラブ世界とパレスチナ問題の関わり」*

今井 静**

1. 本報告の目的および研修の概要

本報告は、独立行政法人日本学術振興会の「若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)」の支援を受けて、エジプト・カイロにおいて2009年1月23日から4月12日までの80日間にわたって修めたアラビア語語学研修についてのレポートである。中でも、自身の研究関心である現代ヨルダンとパレスチナ問題との関わりについて、研修中の経験から新たに得られた知見について報告したい。

このアラビア語の研修事業は、カイロ大学を提携先として実施され、カイロ市中心部に位置するディーワーン語学学校を研修先としている。ディーワーン校では、既存の初学者用の文法テキストおよびオリジナルの会話用テキストを用いたマンツーマンの授業が行われている。基本的にはディーワーン校があらかじめ用意しているカリキュラムおよびレベル分けに従い、さらに学生の能力や要望に応じて授業のアレンジが可能である。筆者は正則アラビア語(フスハー)の習得をめざし、初級から中級レベルの文法および会話のコースを受講した。授業では、テキストを使用した文法事項の解説やフスハーによる映画・音楽の視聴ほかに、研究テーマに関する書籍や新聞、現地識者による論考などの読解を行い、アラビア語を活用して研究を進める上でおおいに助けとなった。

折しも、筆者の渡航期間のはじめにはカイロ・ナセルシティで毎年恒例の大規模な国際ブックフェアが開催されていた(今回の開催期間は2009年1月23日~2月5日)。ヨルダンの書店も多数参加しており、ここでは『国民教育』¹⁾や『ヨルダン・イスラエル和平条約——分析的研究と未来への展望』²⁾といったヨルダン国内で出版されている文献を入手することができた。

2. 問題関心と研修中の課題

筆者は、パレスチナ問題の重要なアクターであるヨルダンと紛争の関わりについて、新たな視座の提起を目標に法的・文化的実態からアプローチすることを研究課題としている。中東和平プロセスの開始以降、パレスチナ国家の建設による二国家解決が紛争解決の手段であるという合意が形成されるに従って、パレスチナ問題におけるヨルダンの位置づけは周縁化されてきた。しかし、国境線による両者の分断が自明のこととされているなかで、ヨルダンおよびヨルダン川西岸地区の住民の国境を超えた生活圏は現在まで維持されてきている。このような現状を踏まえて、あるべき国家の枠組みを所与のものとせず、実態に即した分析をおこなって現代ヨルダンおよびパレスチナをめぐる紛争の新たな理解に寄与することが、筆者の研究目的となっている。

以上のような問題関心のもとに、研修中に取り組んだのが、『ヨルダン+パレスチナ アラビア語・

* 本報告は、独立行政法人日本学術振興会の「若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)」による支援で可能となった海外派遣に関する成果の一部である。

** 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) *Al-Tarbiya al-Waṭaniya*, 2008.

2) *Ṣāliḥ Ahmad al-Qarʿān, Mu'āhada al-Salām al-Urdunnīya al-Isrā'īliya: Dirāsa Taḥlīliya wa Ru'an Mustaqbalīya*, 'Ammān: Dār Yāfā, 2007.

日本語関連用語集³⁾の作成であった。これは、ヨルダンおよびパレスチナの現代史を読み解く上で重要な用語を収集し、解説を付すというものである。具体的には、アラビア語文献や新聞の関連する記事を読み、そこから適当な語彙を収集するという方法で進めていった。また、ヨルダン政府およびパレスチナ自治政府の法律文書や統計文書、ウェブページを利用し、実際に使用されている単語の選定に努めた。その結果、地名や人名、各種条約・合意文書に使用されている文言のほかに、特にパレスチナ問題の文脈で使用されることの多い単語を収集することができた。

筆者がアラビア語の学習をはじめたのは大学院入学後のことであり、研修をはじめた時点では、初級文法の知識と、研究分野におけるごく僅かな語彙を得ているのみであった。そのため、研修当初は文章を読むのにも時間がかかり、簡単な会話もままならない状態であった。しかし、毎日2.5時間から5時間の授業を受け、さらに用語集作成という明確な目標のもとに学習を進めることで、語彙の増加や読解力の向上において約3ヶ月という期間に期待していた以上の成果を上げることができた。さらに、自身の研究関心の説明や、研究内容に関する会話をアラビア語で繰り返し行ったことで、フィールド調査にも活用できる会話力を養うことができた。

3. パレスチナ問題とアラブ世界の関わり

筆者がエジプトを訪れたのは、昨年末からのイスラエルによるガザ攻撃が終了してから、1週間もたない時期であった。カイロ市内各地の街角や地下鉄の車内には、ガザへの寄付や連帯をよびかけるポスターが貼られていた。また、前述のブックフェアには早くもガザ攻撃についての新刊（『ガザにおける最近の戦争』⁴⁾）が用意されており、関心の高さをうかがい知ることができた。筆者の研究関心を知った人から、イスラエルの軍事侵攻についての意見を求められることもしばしばであった。なかには、日本における報道や日本政府の対応に関心を示す人もおり、パレスチナ問題がアラブ世界と外部とをつなぐ共通の話題であることが感じられた。

エジプトでの研修中に、筆者の調査地であるヨルダンとは異なる、パレスチナ問題に対する別の見方に気づくことにもなった。

ヨルダンでは、人口の半数以上がパレスチナ出身者であるという事情を抱えているために、パレスチナに対する関心は当然のものであると同時に、

個々人の政治的立場や信条を明らかにしてしまう非常に微妙な話題でもある。筆者が調査のためにヨルダンに滞在した際にも、自らの問題関心を話題にするためには、相手の出身や経歴を十分に考慮しなければならなかった。しかし、エジプトにおけるパレスチナ問題のとらえ方は、少なくとも



ガザ支援のキャンペーン・ポスター
(カイロ、2009年1月)

3) 今井静 2009『アラビア語 ヨルダン／パレスチナ関連用語集』京都大学イスラーム地域研究センター、若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)。

4) *Al-Harb al-Akhīra 'alā Ghazza*, 2009.

外国人である筆者の前では、それほど複雑ではない。日本人である筆者がパレスチナ人に関心をもつというだけで、非常に歓迎され、また感心されることでもあった。

たとえば語学学校の教師らも、日本人の中東認識を知るという意味で、筆者との意見の交換を有意義に感じているようであった。彼らとのやり取りや現地で入手した文献の購読を通して感じたのは、エジプトにとってのパレスチナ問題は、自身がより密接に関係しているアラブ・イスラエル紛争というより大きな枠組みの一つの要素として捉えられているということである。エジプトとヨルダンとは、ともに1948年以降、ガザ地区または西岸地区を管理下においていたとはいえ、歴史的・地理的要因が大きく異なっており、同じパレスチナ問題についての位置づけもまた異なっている。このように現地語での学習・研究活動や日々の生活を通してアラブ世界とパレスチナ問題との関係性について考えることができたのも、臨地での語学研修による大きな収穫の一つであった。